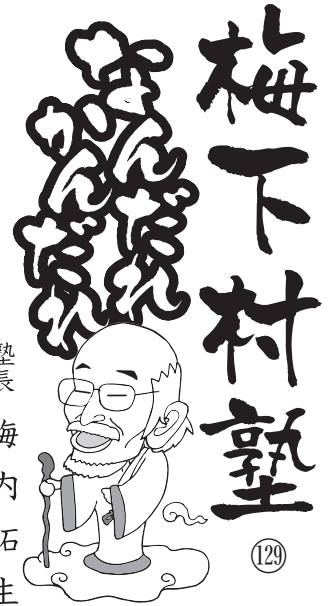


「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～



塾長 梅内 拓生

(129)

(タテの文化とヨコの文化)
東京西多摩の青梅今井病院で行われている「にじたま文華塾」で東海新報の「梅下村塾」の126号と127号に掲載されている、大船渡第一中学校の生徒の五七五と五七七七詠作品が話題になった。

3・11東日本大震災を被った地域の中学生の詠作品というところの興味もあつたものと思われが、詠作品に詠まれているものに感動したものと思われ。青梅の小学生の詠作品も話題にあがった。

青梅の小学生の作品は横書きであった。そこで指摘されたことは、五七五、五七七七は縦書きの方が伝わりやすいということであった。

小学校で長い教員生活を経験した方は、小学校では1学年から3学年には縦書きの文章に力を入れて教え、4学年から横書きの文章にも力を入れて教えるといっていた。これは、国語は縦書きで、理科や数学は横書きになるものと考えると分かりやすい。国語は「情緒」を、理科や数学は「理」を伝えることに適していると考えてみるのも面白い。歴史を振り返ると、ヨコガキの数学や物理学はエジプト、ギリシャ、インドなど西で発達し、東では漢字文化に見られる縦書きの文化が発達している。明治以降日本では縦書き文化と横書き文化の双方が入り混じった文化である。

日本の俳句や短歌は五七五や五七七七の短韻文として世界に広く縦書きと横書きの双方が用いられている。これら短韻文は西欧の短詩には3行詩として横書きで用いられている。今や、日本の俳句や短歌は横書き3行詩短韻文として世界に広まっている。

(一) 中文化祭詠作品へのお返し
西多摩新聞は「被災地に想いを 1000日の集い 福生の清岩院で開催 5000人が来場」の記事を掲載している。スジャータブロジェクトが後援する「東日本大震災追悼と被災地復興を支援するイベント 1000日の集い」が11月30日と12月1日、福生市福生の清岩院(榎本真也任職)で開催された。この西多摩地方で地域文化価値教育活動を展開している「西多摩文華塾」のメンバーが梅下村塾(126)と(127)に掲載された一
中文化祭詠作品に感動してお返しし作品を送ってきました。

(50歳代男性)
東海の 山の中学 文 化祭 歌声ひびく 空 のかなたへ
(70歳女性)
心込め 歌う姿が 目 につかぶ
悲しみを のりこえて うたう 強さあり、
(40歳代男性)
学校、地域など生徒たちの生活環境(自然環境)の背景がうかんでくる。
野に生きる 自然が育む生徒たち 四季と一緒に 心も育つ

(中学2年女子)
中学生の私からすると五七五を詠んでも、だいたいこのような五七五になり、普通の感覚ですが、大人からすると素晴らしい五七五になるんだと思いました。
年齢により、男女により、人生経験により、いろいろな感動や感想がうかんできて、地域を越えて響き合うものなのですね!
(東海新報記事から)
12月14日(土)の世迷言は北朝鮮の金一族の独裁政治の非情な出来事を悲劇として、あるいは草の根の人々から搾取に搾取を重ねてきた独裁政治の最後の幕開けか、どちらであるのか情勢がよみにくいことを報じている。

第4面の広域トピックス一地域紙ネットワークには「盛岡の夜はSL銀河号 1月13日まで点灯 123周年の駅前彩る盛岡タイムス」、そして三陸新報の「港包むイルミネーション 気仙沼」が掲載されている。宮沢賢治の世界への郷愁が現代では巨大な人工の光の世界となつて表現されている。
第3面の梅下村塾(127)には宮沢賢治の風の又三郎とカナダのルーシーモンゴメリの赤毛のアンの物語に自然文化を超えて人間の魂に響いて来るものがある。歴史が教えているように、権力の亡者は滅亡するものなのである。21世紀は自然と人間の世界に響き合う魂の創造を目指さねばならない。気仙からの歴史と魂の創造への挑戦に期待したい。